はしがき

本研究会はエスニック・マイノリティに関心を持つ若手研究者たちによって、2010 年 11 月に設立された。設立の主旨は以下の通りである。

エスニック・マイノリティ研究会（Association for Ethnic Minority Studies）設立主旨

- **ネイション、民族、エスニシティなどについての知識を共有しつつ「エスニック・マイノリティ」とは何なのかを学術的に議論していく場を提供する。**
- **先行研究に関する知識を共有するとともに、その議論の有効性や各自の研究に対する示唆について考える。**
- **各自の研究や外部の講演者の研究から、他地域の実情を把握し、各自の研究に生かす。**

■■■第五期研究会報告■■■

第五期（2014 年 8 月～2015 年 7 月）には、計 8 回の研究会（内訳：書評会 4 回、研究報告会 3 回、研究ワークショップ 1 回）を開催した。

書評会では現在の民主主義的な国家制度とマイノリティとの関係を考察する意図から W・キムリッカの著作『土着語の政治』を取り上げた。また、研究報告会では報告者が扱った事例と会員各自が対象にしている事例とを比較する議論も交わされ、それぞれが新たな知見を得た。

第五期の最後には獨協大学教養学部との共同主催で研究ワークショップ（2015 年 7 月 18 日）を開催し、研究会のこれまでの研究蓄積を基に積極的に共同研究に取り組む姿勢を改めて確認した。

第四十六回研究会

（2014 年 11 月 22 日、
於　国分寺市本町・南町地域センター）

【研究報告】現代イランのアルメニア人マイノリティとアイデンティティ・ポリティックス

［報告者］渡辺　大作
（東京大学大学院総合文化研究科）

概要

第四十六回研究会では、渡辺がイランのアルバニア人コミュニティのアイデンティティ・ポリティクスに関する研究報告を行った。

報告の冒頭ではアルメニア人ディアスポラが辿った歴史が手短に紹介され、イラン国内のアルメニア人コミュニティは 17 世紀のサファヴィー朝期から形成され始めたこと及び現在ではイラン国内で最大の非ムスリム・マイノリティとなったことが確認された。

続いてイスラム政権下のイランで発行されているアルメニア語新聞の論調が分析された。渡辺によれば、イランのアルメニア人コミュニティはマイノリティの権利を確保する目的からイスラム体制への忠誠を示す傾向を持つ。その例として、アルメニア人のアイデンティティに影響を及ぼした 1915 年のアルメニア人ジェノサイドと反イスラエル姿勢を結びつける論調などが指摘された。結論として、渡辺はイラン国内のアルメニア人コミュニティと西欧のアルメニア人コミュニティとの間に差異が登場していることを指摘する。

報告後もアルメニア国内外のアルメニア人コミュニティの関係などについて活発な議論が交わされた。

（香坂　直樹）

第四十七回研究会

（2014 年 12 月 14 日、
於　東京外国語大学海外事情研究所）

【書評】ウィル・キムリッカ『土着語の政治』
第一章、第二章、第三章
［担当］渡辺　大作
（東京大学大学院総合文化研究科）
周　俊宇
（東京大学大学院総合文化研究科）

書誌情報：
ウィル・キムリッカ著『土着語の政治　ナショナリズム・多文化主義・シティズンシップ』（岡崎晴輝・施光恒・竹島博之〔監訳〕、栗田佳泰・森淳嗣・白川俊介〔訳〕、法政大学出版局、2012 年）

概要

第四十七回研究会は本書の第一部「マイノリティの権利に関する論争の展開」の書評会として開かれた。

第一章「マイノリティの権利をめぐる新たな論争」（担当：渡辺）では、マイノリティの権利に関する議論について、「コミュニタリズムとしてのマイノリティの権利」、「リベラルな枠組み内でのマイノリティの権利」、「ネイション形成にたいする応答としてのマイノリティの権利」の段階に分けて概観したうえで、論争の帰結と問題点が示された。

第二章「リベラルな文化主義―生じつつある合意？」（担当：周）では、多文化主義とマイノリティの権利に関する論争は、リベラル・ナショナリズムとリベラルな多文化主義を「リベラルな文化主義」の異なる形態として描けるという合意が生じつつあるが、方法論や規範にかかわる疑問が残っていると指摘された。

研究会では、第一章と第二章の概要やコメントの外、第三章で提示された「マイノリティの権利のリベラリズム理論は必要か」との問題についても議論がなされた。

（周　俊宇）

第四十八回研究会

（2015 年 1 月 25 日、
於　国分寺市ひかりプラザ教育センター）
【書評】ウィル・キムリッカ『土着語の政治』
第四章、第五章
［担当］重松　尚
（東京大学大学院総合文化研究科）
香坂　直樹
（跡見学園女子大学）

概要

第四十八回研究会では、前回に引き続きキムリッカ著『土着語の政治』の書評を行った。第四章を重松が、第五章を香坂が担当した。

第四章は、現在の人権だけでは民族文化的正義には不十分で、さらにある種の不正を悪化させかねないことを明らかにしている。著者は、人権規範は様々なマイノリティの権利によって補完されなければならないとした上で、それを実現させるための適切な制度について論じている。

第五章は、ナショナル・マイノリティを受けいれる仕組みとしての連邦制に焦点をあてている。連邦制が成功する鍵として、下位単位の境界線をいかに引くか、各レベルの政府間で権限をいかに配分するか、の二点をあげている。また、著者は、連邦制を採用した場合でも分離独立の脅威が必ずなくなるというわけではない点も指摘している。

発表後の討論では、キムリッカの議論を糸口とし、各参加者の研究対象地域における事例にも言及しながら、意見交換が行われた。

（重松　尚）

第四十九回研究会

（2015 年 2 月 15 日、
於　東京大学駒場キャンパス）
【書評】ウィル・キムリッカ『土着語の政治』
第九章、第十章

［担当］井垣　昌
（明治大学）
遠藤　嘉広
（東京大学院総合文化研究科）

概要

第九章（担当：井垣）は、カナダとアメリカの人種的（有色）マイノリティの状況、特に「反体制的下位文化の形成」が懸念される黒人に焦点を当てる。歴史的・社会的な経緯や現状における両国の相違を踏まえた上で、カナダにおける黒人の地位向上の手立てを、アメリカと比較しながら考察している。

第十章（担当：遠藤）では、十八世紀フランスの啓蒙思想家コンドルセの進歩観を手かがりに、コスモポリタニズムとリベラル・ナショナリズムの関係について論を進める。両者は対立するものであると論じられることが多いが、キムリッカは、対立を誇張せず、共通点に目を向けるべきだとする。コスモポリタニズムの真の敵は排外主義、不寛容、差別などであり、リベラル・ナショナリストがコスモポリタニズム的徳性を体現することは可能であると説いている。

参加者からは、現代のコスモポリタニズムも取り上げるべきとの意見が出されたほか、第九章と第十章の考察にみられる西洋中心主義的な見方から生じる問題点などについて議論がなされた。

（遠藤　嘉広）

第五十回研究会

（2015 年 3 月 1 日、
於　東京大学駒場キャンパス）

【研究報告】フランスにおける「ジプシー／ロマ」をめぐる表象、法政策、現実

［報告者］左地　亮子
（日本学術振興会）

概要

ドキュメンタリー映画の鑑賞とともに左地がおこなったこの研究報告では、「ジプシー／ロマ」をめぐるフランスの法政策の展開を追いながら、二十世紀初頭から現代にいたるまで、フランスがどのように「内なる他者」として「ジプシー」を表象し、現実の法政策の対象者として選別していったのかという点を明らかにした。

本研究会では、これまで、キムリッカ等の市民社会論や多文化の社会理論についてレヴューをおこない、精力的に議論してきたが、今回、アングロ・サクソン的な多文化主義とは異なるマイノリティの統合原理をとるフランス共和主義の現実と課題について、「ジプシー」という具体的かつ「例外的」事例を通して掘り下げることができたのではないかと思う。

参加者からは、「ジプシー」をめぐる身分登録やフランスの「多文化主義的」政策の具体的内容に関する質疑が数多くなされると同時に、他地域の事例や身分登録をめぐるより包括的な議論も提示され、実りある意見交換ができた。

（左地　亮子）

第五十一回研究会

（2015 年 3 月 22 日、
於　東京大学駒場キャンパス）

【研究報告】アルゼンチンでプフリャイを踊る人たち―ボリビア民俗舞踊をめぐる自他の表象―

［報告者］井垣　昌
（明治大学）

概要

アルゼンチンは、ボリビア移民の最大受け入れ国である。エスニック・マイノリティとしての彼らのコミュニティ形成にはボリビア由来の祝祭があり、これら祝祭ではボリビア由来の民俗舞踊が

表象される一方、踊り手にはアルゼンチン人も少なくない。

今回の報告では、祝祭におけるボリビア文化の表象をめぐるボリビア人とアルゼンチン人の認識を考察し、まず、ボリビア文化表象が、コミュニティ形成に加え、アルゼンチンの公的催事による民族的多様性の表象にも資されていることを指摘した。次に、踊りの種類やグループを俯瞰し、プフリャイを踊るグループを事例として、踊り手とコミュニティの関係、踊り手たちの関係や祝祭への参加について、国籍とアイデンティティの見地から分析し、異文化接触による踊り手の変容によるグループの構成および活動領域への影響を論じた。他地域が専門の参加者との質疑応答からは、今後の研究に有益な様々な視点が得られた。

（井垣　昌）

第五十二回研究会

（2015 年 5 月 17 日、
於 東京大学駒場キャンパス）

【書評】ウィル･キムリッカ『土着語の政治』

［担当］北田　依利
（東京大学大学院総合文化研究科）
角田　延之
（四日市大学）
栗林　大
（中央大学社会科学研究所）

概要

第五十二回研究会では、キムリッカ『土着語の政治』の第十一章、第十二章、第十五章について報告がなされた。

第十一章（担当：北田）については、マイノリティ・ネイション、国民国家、超国家制度の三つのレベルを公正に評価する理論の必要性、およびこれら三つのレベルの相補性、というキムリッカの結論がまとめられ、彼のリベラル・ナショナリストへの批判に新しさが認められた。北田からは、キムリッカが共通のアイデンティティや連帯意識の必要性を疑わない点に疑問が呈された。

書評の章である第十二章（担当：角田）では、イグナティエフとパフ（公民的ナショナリズムとエスニック・ナショナリズムを過度に峻別する）、グリーンフェルド（ネイションの強い持続性を説明しない）、そしてタミール（結果的になぜ国家が必要とされるのかを説明しない）らリベラリストの主張へのキムリッカの批判がまとめられた。

第十五章（担当：栗林）ではナショナル・マイノリティと移民の間の緊張関係が扱われた。そしてリベラル多文化主義がリベラリズムの規範に抵触するジレンマが説明され、移民の大多数が許容している場合、およびエスニック・ナショナリズムに内包される危険の排除のためである場合などを条件に、リベラリズムの規範の侵害は擁護されるというキムリッカの見解がまとめられた。

（角田　延之）

第五十三回研究会

（2015 年 7 月 18 日、於　獨協大学）

【研究ワークショップ】エスニシティと身分登録：事例と討論

［第一部　報告者］
松岡　格　（獨協大学）
左地　亮子（日本学術振興会）
香坂　直樹（跡見学園女子大学）
小島　敬裕（日本学術振興会）

［第二部　コメンテーター］
森下　嘉之（茨城大学）
角田　延之（四日市大学）
辻河　典子（近畿大学）
栗林　大　（中央大学社会科学研究所）

概要

2015 年 7 月 18 日（土）の 13 時から、獨協大学にて、ワークショップ「エスニシティと身分登録—事例と討論」を開催した。今回は、昨年行った国際シンポジウム「姓名とエスニシティ」の内容・成果をふまえ、これから本研究会が取り組むべき研究テーマの一つである「エスニシティと身分登録」について企画・展望するものである。

第一部の冒頭では今後の研究方針も含めて松岡格（獨協大学准教授）が「台湾のエスニシティと身分登録—可視化・書類・カテゴリー」についての発表を行った。続けて左地亮子（日本学術振興会特別研究員）による「フランスの『ジプシー』と身分手帳—共和国の『内なる他者』の構築と管理」についての報告、香坂直樹（跡見学園女子大学兼任講師）による「チェコスロヴァキア第一共和国の住民管理とセンサス—1919 年のスロヴァキアでの『暫定センサス』から見えるもの」についての報告、小島敬裕（日本学術振興会特別研究員）による「ミャンマーにおける宗教・民族と身分登録」についての報告が行われた。

第二部では、第一部の報告内容を受けて森下嘉之（茨城大学准教授）、角田延之（四日市大学兼任講師）、辻河典子（近畿大学特任講師）、栗林大（中央大学社会科学研究所客員研究員）からコメントがなされた。今回のコメントは、報告者各自への個別対応のコメントという形ではなく、第一部で扱われた論点や事例に対する各コメンテーターの所見を述べ、自らの研究地域や領域から事例や観点を補うという形をとった。総じて、本ワークショップで示された論点や研究方針をふまえつつ、登壇者それぞれの事例や観点から、今後研究が拡充されるべきことが確認された。

そして第三部の総合討論では会場から寄せられた質問、およびコメンテーターからの質問を受けて第一部登壇者からの応答がなされた。新しい研究テーマへの企画・展望としては期待以上の、豊富な成果が得られた。

（松岡　格）

■■■会員近況■■■

8 月末、一時帰国を終えてセルビアに戻り、滞在許可の延長のために警察署に赴くと、警察署の前に外国人の行列ができていた。これに並ぶのかと一瞬気が遠くなりかけたが、よくよく観察すると身なりから難民の列であることが知れた。バス駅周辺はさながら難民キャンプの様相を呈している。欧州北部を目指す中東からの難民の波が、ギリシア、マケドニアを経由してセルビアやハンガリーへと押し寄せている。彼らの多くにとってセルビアもマケドニアも中継地に過ぎず、ここに留まろうという意志は皆無である。だが難民の欧州北部諸国への受け入れは遅々として進まず、全員が移住できるとも限らない。セルビアにもマケドニアにも彼らを移住者として受け入れる気は毛頭ないだろうが、この状況が仮に固定化すれば国内に新たなエスニック・マイノリティが生まれる可能性がある。今後も状況を注視していきたい。

（中澤　拓哉）

2015 年のヨーロッパでは、急増する中東からの難民への対処が喫緊の課題となっている。私はハンガリーからの政治亡命者を通じて戦間期ヨーロッパ史を考察してきたので、研究との関連でも事態を注視している。現状では制度の矛盾や各国家の見解の相違に注目されがちだが、この先の難民の生活保障と社会統合に関してはエスニシティやネイションも論点となるだろう。本研究会で学んだことを踏まえ、今後も幅広い視点から分析を続けたい。

（辻河　典子）

フランスのカレー周辺にイギリス入国を希望する数千人がテント暮らしをしている。彼らの宿営地は英語で“the Jungle”と呼ばれているが、英仏海峡を越えたところに住むイギリス人の目にこのテント群は、ジョセフ・コンラッドが 1899 年に出版した『闇の奥』に描かれるコンゴ奥地の未開のジャングルのように映っているのかもしれない。『闇の奥』では、コンゴ川の暗闇がテムズ川の暗闇と重なっていくエンディングで世紀末の帝国の不安を見事に描き出しているが、はたして二十一世紀のジャングルはテムズ川に到達するのか。イギリスを始めとした EU の国境・移民問題から目が離せない。

そのような中、日本では今年も 7 月の EMS ワークショップが成功に終わった。7 月とワークショップ。幸運にも今まさに私達は EMS の伝統の創造を体験している。

（JA　日下）

2015 年 9 月にスロヴァキアを訪問した。隣国ハンガリーでは中東からの難民の急増が大きな問題となっており、スロヴァキアでも、自国の対応とも絡みいわゆる難民問題は大きく報道されていた。その一方、ブラチスラヴァ市内や駅、そしてブダペシュトからチェコに向かう国際列車でも難民の姿は見えなかった。主要なルートを外れるだけで大きく事情が変わることに驚きを受けた。

キムリッカや研究会で扱った著作で扱われていたように自由民主主義的な体制の中に彼らをどう統合していくのか、今後も EU の対応に注目したい。

（香坂　直樹）

■■■今後の予定■■■

第六期は 2015 年 8 月から始まりましたが、代表幹事を務める松岡さんが多忙だったこともあり、研究会の開催は 12 月までずれ込みました。

第六期の初回の研究会（通算第五十四回研究会）は、2015 年 12 月 12 日にワークショップ『台湾原住民の姓名と身分登録：過去と現在をつなぐ文化・社会・制度』（於：早稲田大学）として開催されました。

続く第五十五回研究会は 2016 年 2 月 6 日に獨協大学で開催され、北田依利さん（東京大学大学院総合文化研究科）が『米国とエスニック・マイノリティ：黒人を記念する道の名付けを事例に』という題目で研究報告を行いました。ニューヨーク市内の道の名付けを題材に、改名を求める人々の意図や改名行為の影響などを領域横断的に分析する報告でした。北田さんの報告に続いて、これまで研究会が注目してきた記念や境界形成への関心からも活発な議論が交わされました。

次回（第五十六回）の研究会は、森下嘉之さん（茨城大学）の研究報告です。3 月 10 日（木）14 時開始の予定で、会場は獨協大学です。

＊　＊　＊

2016 年度の北大スラブ・ユーラシア研究センターの「プロジェクト型」共同研究に、研究会の活動の一環として、森下さんが申請した『東欧の「境界（ボーダー）」における領域性・空間認識の比較研究ーチェコスロヴァキアおよびハンガリーを事例にー』が採用される運びとなりました。期間は 2016 年 4 月からの 1 年間です。2017 年 2 月下旬に開催予定のシンポジウムに向け、今期の研究会活動の一つの柱として多くの会員が参加する場になるかと思われます。

『エスニック・マイノリティ研究会
ニューズレター』No. 5
2016 年 2 月 20 日発行

責任編集：
香坂　直樹

発行者：
エスニック・マイノリティ研究会
幹事連絡先：
〒340-0042
埼玉県草加市学園町 1-1
獨協大学国際教養学部
松岡　格

E-mail songgangge@gmail.com
URL https://sites.google.com/site/emstudies/